論　文　要　約

論文題目　中間地帯のイコノロジー――二〇世紀の歴史家とイメージの現前・表象・記憶

申 請 者　二宮望

一九八〇年代に「美術史の終焉」が叫ばれてからというもの、美術史学の歴史を語ることに積極的な意義を見出すことは難しくなった。伝統的な美術史学の刷新を旗印に勢いを増す、近年の視覚文化研究やイメージ学は、こうした事態をいっそう加速させている。ハンス・ベルティンクによって唱えられた「美術史の終焉」は、今日「美術史の始原」を探求する幾人かの研究者によって相対化させられているが、本論文が目指すのは、それとはまた別の「美術史の歴史」を描き出すことである。そこで、本論文の序章では、ここ数十年間に深化してきた「イメージ」をめぐる理論的な考察から、〈現前〉・〈表象〉・〈記憶〉という三つの主題を取り出し、二〇世紀の歴史家の言説と実践を分析する道筋をつけた。こうした試みを推し進めていくうえで、本論文はアビ・ヴァールブルクに由来する「中間地帯のイコノロジー」という言葉をひとつの指針とした。ここには、イメージと人が、芸術作品と美術史家のように互いに分離するのではなく、相互作用や葛藤を抱えこみながら、さまざまなかたちで交流しあっているという根本的な認識が表明されている。

第一部「〈現前〉：沸騰するイメージの攻防」は、イメージが単に認識や分析の客体としてではなく、ひとつの社会的な行為者（エージェンシー）として現われてくる二つの事例（第一章、第二章）を考察する。

第一章は、ヴァールブルクの切手研究を主題とする。「イメージ史家」を自認するヴァールブルクは、保守的な「審美化する美術史」を批判するために、それまで講壇の美術史家が真面目に扱ってこなかった視覚的現象を積極的に自身の研究に取り込んでいった。その代表例である切手は、ヴァールブルクにとって、いくつもの点で「イメージ」概念の模範となるべき存在であった。一九二七年、ヴァールブルクは、当時ヴァイマール共和国の芸術長官を務めていたエドヴィン・レーツロープとともに、切手をめぐるシンポジウムを開催し、「世界の精神交通における切手イメージの役割」という講演を行なった。本章は、そこで作成された図像パネルを詳細に検討し、このヴァールブルクの取り組みがイメージ研究にとっていかなる意義を持つのかについて問い直した。それは、とりわけ、切手を政治的な視覚シンボルとして読み解く独自の文化史的観点に凝縮されている。ヴァールブルクが宗教改革期の図像分析に用いた「標語的イメージ」は、切手をはじめとする二〇世紀の政治のイメージ化をきわめて有効にとらえる概念装置であった。

第二章は、エルンスト・クリスとエルンスト・H・ゴンブリッチの未完（未刊）のカリカチュア・プロジェクトを取り扱った。出発点として、二人が携わった一九三七年のオノレ・ドーミエ展を取り上げた。「新しい写実主義者」としてドーミエを位置づけるクリスは、この回顧展を通して、フランスの諷刺画家の機知に富んだイメージの政治的な効力を、暗雲が立ち込めるウィーンの観衆に提示した。クリスとゴンブリッチは、カリカチュアを人類学的とも呼べるような俯瞰的な視点からイメージ魔術の系譜に位置づける。もちろん、それは原始的な呪術的思考と同一のものではないが、いかに美

的・芸術的に洗練されていようとも、深いところでイメージと現実を混同してしまう魔術の伝統に根ざしているのである。さらに、二人はエルヴィン・パノフスキーとマックス・ドヴォルジャックを参照しつつ、よりミクロな芸術史の視点からもカリカチュアの歴史的位置づけを点描する。ところで、フロイトの愛弟子でもあったクリスは、カリカチュアに精神分析的な観点からも分析を施す。そこで明らかとなるカリカチュアの複雑な社会的・心理的なメカニズムは、うまく作動すれば、崇高さを滑稽さに転換するという政治的効用をもたらすことができるのである。

第二部「〈表象〉：近代の眼に映る過去」は、不在の過去（中世）が政治的イデオロギーを帯びながらイメージのなかで回帰してくるという現象を二つの事例（第三章、第四章）に即して批判的に検討した。

第三章では、パーシー・エルンスト・シュラムの王権象徴研究がヴァイマル共和政下の中世主義に照らして論じられた。『支配者の徽章と国家の象徴』という画期的な研究によってその名を中世史学界にとどろかせたシュラムは、王冠、王笏、玉座など権標について歴史研究を通して、政治権力が不断に必要とする権威という象徴的な力に迫った。こうした重厚な権力象徴論は、近年、ジョルジョ・アガンベンによっても注目されているが、権威の中心に蔵される「栄光」という現象にシュラムがもっとも接近したのは、第二次世界大戦前に行っていた中世ドイツ皇帝オットー三世を論じた研究である。ハイデルベルク大学に提出された学位論文はこの皇帝に捧げられたモノグラフであった。オットー三世の心理分析を試みるシュラムの歴史叙述は、ヴァイマール期に広く見られた、歴史上の人物を神話的な英雄に仕立てる伝記制作のひとつに属している。一九二二年、シュラムは、彼の師の「お膝元」、ヴァールブルク文化科学図書館で中世の写本絵画について講じている。その中でもとりわけオットー朝の皇帝に関する図像分析は、学位論文で披露された神話化作用を補完し、さらに高めるものであった。《アーヘン福音書》で鮮やかに描かれた皇帝の出で立ちを政治神学的に解釈するシュラムの図像分析には、中世のファンタスムを掻き立ててやまない「栄光の政治的図像学」が露見しているのである。

第四章では、中世ゴシックという理想像を構築しようとするハンス・ゼードルマイヤの大聖堂研究が取り上げられる。一九五一年のミュンヘン大学教授就任とほぼ同時期に刊行されたゼードルマイヤの大聖堂研究の集大成『大聖堂の生成』（一九五〇）は、大聖堂をキリスト教における天国の模像とみなすテーゼを打ち出し、これまでの構造力学的な大聖堂研究を乗り越えようとした。ゼードルマイヤの斬新な主張には、出版当初から、さまざまな角度から批判が寄せられた。ゴシック大聖堂を詩的なイメージによってつかまえるゼードルマイヤは、二〇世紀に興隆した「中世主義」の調子を帯びている。近代は、表向き、世俗化・機械化・民主化を増進することで、前時代的な足かせを切り捨ててきたが、そこで噴出してくる社会不安に直面したとき、時代遅れに思われた暗黒の中世は、不気味な魅力をたたえながらふたたび現代に回帰してくる。ブルーノ・タウトやヴァルター・グロピウスのような建築家が大聖堂に見た理想的な幻影は、『大聖堂の生成』と深いところで共鳴している。ゼードルマイヤの場合には、諸ジャンルに分裂していく近代芸術を立て直そうとする総合芸術への意志が顕著に見られ、こうした全体性の志向は、危うげなイデオロギーと癒着しつつ、大聖堂研究をファシズム的なものへと接近させることになる。

第三部「〈記憶〉：イメージの「メタ歴史学」に向けて」では、記念碑と芸術研究のための複製図版が議論の俎上に載せられ（第五章、第六章）、イメージを用いた歴史の再構築が主題化される。

第五章は、ラインハルト・コゼレックの記念碑研究を論じる。一九八〇–九〇年代にかけて、ドイツでは、ホロコースト犠牲者のための記念碑計画をめぐっておびただしい数の議論が飛び交った。コゼレックは、この「記念碑論争」に積極的に介入した歴史家のひとりである。その発言でとりわけ興味深いのは、ノイエ・ヴァッヘに置かれたピエタ像に向けられた批判である。この頃、コゼレックは独自に記念碑研究を行なっており、論争における図像学的な着眼点は、この堅実な歴史研究に由来するものであった。そこでは、記念碑がどのような経緯をたどって近代化を迎えたかが、「死者礼拝」という人類学的な視点をもって分析される。コゼレックは、早くも一九六〇年代にイメージの政治的意味や利用に注目し、「政治的イコノロジー」という学問構想を提起している。それは、単純な図像分析に終止するものではなく、時代の感性を読み解く独創的な手法を開拓するものであった。記念碑研究も、その一環として位置づけられている。そのことがもっとも明瞭に顕在化するのが、コゼレックが記念碑研究のかたわらで撮りためていた無数のスナップ写真であり、そこには記念碑のなかに宿る重層的な時間と記憶が垣間見えている。

第六章では、ふたたびヴァールブルクへと立ち戻り、彼が晩年に着手した図像アトラス「ムネモシュネ」というプロジェクトの成立と継承過程を追跡した。まず、「ムネモシュネ」の完成に欠かすことのできなかった一九二八–二九年のイタリア旅行が取り上げられ、ローマという都市の重層的な記憶がどのようにして「ムネモシュネ」最終版のいくつかの図像パネルに結晶化したのかについて論じた。本章はさらに、イタリア旅行以前に制作された図像パネルにも視野を広げ、祝祭という主題がその前後でいかなる変遷を遂げたかについて詳細な検討が行われた。そこでは、これまでヴァールブルク研究で陰に潜んでいたゴヤのイメージがクローズアップされる。次に、「ムネモシュネ」以後の受容史に視点を移し、主要な作者であったヴァールブルクの手を離れたあとで、それがどのような軌跡をたどったのかが、エルンスト・H・ゴンブリッチの「誕生日のアトラス」にもとづいて詳述された。ゴンブリッチのアトラスとの比較を通じて、ヴァールブルクのアトラスが記憶の「ろ過フィルター」という独自の特性を有していることが強調された。最後に、アトラスのなかで展開された記憶がいかに語られたのかという問いが立てられ、ヴァルター・ベンヤミンが「物語作者」と呼んだ類型になぞらえて、ヴァールブルクの雄弁で華麗な「イメージの語り」が浮き彫りにされた。

本論文は、六つの事例分析を通して、二〇世紀の芸術研究において、分析対象のイメージへの地滑りが否応なしに進行していったことを確認してきた。ドイツ語でイメージを意味するBildという語彙は、英語のpictureやimage、illustrationやfigureなどをも包含するきわめて広範な概念であり、それゆえに「イメージ学（Bildwissenschaft）」は、狭義の芸術作品に限定されていた美術史を相対化するポテンシャルを秘めている。その意味で、本研究の取り組みは「イメージ学」の源流を二〇世紀の思想史に探り当てる試みであるとともに、美術史の射程を見極める「メタ美術史」を企てるものでもあったと言うことができるだろう。ところで、本研究の「イメージ」は、ことごとく政治的な重みを与えられてきた。第一部の観察者に強く働きかけてくる〈現前〉から、第二部の過去の回帰としての〈表象〉を経由して、第三部のイメージの底流に見出された〈記憶〉へといたる本研究の道程は、政治的図像学からイメージの歴史編纂術へとゆるやかに推移していく運動としてとらえなおすことができる。政治的な思わくによってエネルギーを充填させられたイメージは、ヴァールブルクが「熟慮」という言葉に込めた距離化の働きによって、わずかに歴史的な知へと導かれる余地を築くことができる。冒頭で提起した「中間地帯のイコノロジー」とは、まさにこのイメージの政治性と歴史性の微細な偏差を観測

するためのものさしであり、それゆえ、本論文は二〇世紀における「中間地帯のイコノロジー」の振幅を見届けるものであったと結論づけることができるだろう。